

# JAIR Newsletter

No.173 October 2022

日本国際政治学会

  
<https://jair.or.jp/>

## [目次]

巻頭言.....	1	2022年度学会奨励賞について.....	5
武者小路公秀先生を偲ぶ.....	2	2023年度研究大会報告募集について.....	6
事務局からのお知らせ.....	2	理事会便り.....	7
2022～24年期組織図・構成.....	3	編集後記.....	9

## 移民・難民の国際政治研究の現在

石井由香

2018年の『国際政治』第190号で、「移民・難民をめぐるグローバル・ポリティクス」という特集を編ませていただいた。その後今までに生じた国際社会を揺るがす「事件」は、移民・難民という越境移動する人々をめぐるこれまでの課題をあらためて浮き彫りにし、解決への取り組みをさらに促しているように見える。

新型コロナウイルスの感染拡大は、国境閉鎖による人の越境移動の停止という事態を招いた。移民・難民は閉塞的な労働・生活環境や経済状況の悪化に伴う失業など、さまざまな苦難に直面した。こうした苦難に、国際機関、受入国、送出国、NGOなど各種のアクターも人権擁護への新たな、また一層の取り組みを迫られた。移民受入国では移民の高度人材、労働者への依存度の大きさを認識し、優秀な人材、必要な労働者の確保への対応が行われる一方で、経済不安、閉塞感による国民の不満が移民をめぐる世論にどのように影響するのかが懸念されるようになった。

ロシアのウクライナ侵攻に伴うウクライナからの避難民への対応は、欧米諸国のみならず日本にも、受入れにあたっての国際社会の負担・責任の分担の重要性を突き付けている。さらに、ウクライナからの避難民の受入れは喫緊の課題であるが、これを特別な事例とすることなく、すべての難民・庇護希望者を対象とする国際難民レジームへと結びつける展望が求められるところでもあろう。

この2つの「事件」のいずれも、ヒト・モノ・カネ・情報の自由な越境移動を伴う深い相互依存関係にある国際社会のありように見直しを迫るものである。しかし、新型コロナウイルス感染拡大は、移民・難民の人権擁護、受入国における国民と移民の関係、移民のグローバル・ガバナンスにどのような影響を与えているのか。少しずつ国境が開かれつつあるなかで、移民受入国は人材獲得競争と選別的な移民政策を依然として進めている。また、移民・難民により厳しい目が国民から向けられ、政権自体が排斥主義的傾向を持つ国も少なくない状況で、難民受入れの国際社会の負担・責任の分担の実現に向けて、ウクライナ-ロシア関係、国際関係における対立軸の大きな変化は何らかの影響を与える契機となるのか。

移民・難民の受入れをめぐる国際機関、地域機構、国家、NGO、そして当事者である移民・難民といった諸アクターの連携および協働と、国際社会の難民に関する負担・責任の分担は、これまで以上に求められているといえる。2つの「事件」は、それぞれかつてない規模の影響を国際社会に与えてきているが、明らかになった課題については、歴史的経緯を踏まえ、「変わるものと変わらないもの」を注意深く読み解かねばならない。研究という営為の難しさをひととき感じる、コロナ3年目の秋である。



---

## 武者小路公秀先生を偲ぶ

---

2022年5月23日、武者小路公秀先生が92歳で逝去された。武者小路先生は日本における戦後国際政治学、国際関係論、そして平和研究の先駆者であった。1950年代の本会の草創期にたいへん貢献され、名誉理事でもあった。

ベルギーのブリュッセルで1929年に生まれた武者小路先生は学習院大学政経学部政治学科を卒業され、パリ政治学院への留学を経て、学習院大学、上智大学等で研究と教育に携わった。上智大学では1969年には外国語学部国際関係研究所の創設に貢献、同研究所所長にも就任した。行動科学が隆盛した1960年代には、渡米して早く当時の最先端の方法論を吸収し、日本に紹介した。ゲーム理論を用いて外交政策を分析し、1970年代にはモートン・カプランらとも数多くの著作を英語で出版している。

この時代には政治科学の限界をいち早く察知して、グランドセオリーへと回帰した。たとえば『転換期の国際政治』（岩波新書）や、鶴見和子との共著『複数の東洋／複数の西洋』（藤原書店）等はそれらの成果の一例であり、西欧世界の学問体系のみの借り物ではなく、アジアに住むわれわれ非西欧と第三世界視点の国際政治学ならびに文明論を模索した。いまコロナ後にアジア人差別が横行している現在、再びリアリティを帯びている著作でもある。

国連大学が設立された当初の1976年からベルリンの壁が崩壊する1989年まで副学長も務めた。米ソ冷戦の権謀術数にも絡めとられることなく、第三世界諸国からの支持を得て、1985年にはアジア人で初の世界政治学会（IPSA）会長に就任した。

武者小路先生は冷戦期も冷戦後も、現実の国際政治のなかで平和主義の旗を掲げ続けるとともに、ご自身の研究を実践された研究者でもあった。帰国子女としていじめを受けた経験等から共苦の連帯をすべく、平和主義や人権の推進、反差別運動の第一線に立ってきた。ノーベル賞受賞者の湯川秀樹らが1955年に結成し、日本国憲法の平和主義に基づき反核非戦の提言を続けている「世界平和アピール七人委員会」委員も長年務めた。また反差別国際運動（IMADR）事務局長、名誉代表理事、一般財団法人アジア・太平洋人権情報センター（ヒューライツ大阪）会長、大阪国際平和センター会長などを歴任してきた。

武者小路先生を囲む会、通称「武者研」は国内外の若手国際政治学者にとって貴重な修行の場で、数多くの若手が鍛えられた。われわれは「武者先生」と呼んでいた。辛い政治状況下でも、武者先生は独特の間合いとウィットでわれわれを和ませてくれた。屈託のない笑顔で「今日も囲まれてしまいましたね」と仰った先生のあのチャーミングさは、まるで昨日のこのように忘れられない。そしてもう武者先生を囲めないことが悔やまれてならない。いままでご指導ありがとうございました。ご冥福をお祈りします。

（五野井郁夫）

---

## 事務局からのお知らせ

---

### 1. 研究大会の開催

2022年度の研究大会が10月28日（金）～30日（日）に仙台市の仙台国際センターで開催され、盛会のうちに終わることができました。会員の皆様に感謝いたします。

### 2. 新入会員の承認

第2回理事会（2022年8月20日開催）、第3回理事会（2022年10月28日開催）で入会申込書等が回覧され、計42名の新入会員が承認されました。会費の納入をもって正式に会員となりますので、入会を承認された方々は会費を納入してくださいませよう、お願いいたします。

### 3. 今後の研究大会予定

2024年度の研究大会は、11月15日（金）～17日（日）に札幌市の札幌コンベンションセンターで開催する予定です。なお、2023年度の研究大会（実行委員長は渡邊智明会員）は、福岡市の福岡国際会議場で、11月10日（金）～12日（日）に開催されます。新型コロナウイルス感染症の流行状況等により会場を変更する場合は、ウェブサイト、会員向けメールリストでご案内します。

### 4. 事務局スタッフのご退職とご就任

2022年7月末日をもって事務局のスタッフ、半田真奈美さんがご退職され、9月1日付で石田美貴さんが新たな事務局スタッフに就任されました。



企画・研究委員会	大島美穂（主）、板橋拓己（副）、五十嵐元道、小阪裕城、下谷内奈緒、辻上奈美江、浜由樹子、牧野久美子、森田吉彦、湯川拓 研究分科会ブロックA幹事、B幹事、C幹事、D幹事
研究分科会	研究分科会代表幹事：齊藤孝祐 【ブロック幹事】 ブロックA（歴史系）：福田円、ブロックB（地域系）：青木まき ブロックC（理論系）：齊藤孝祐、ブロックD（非国家主体系）：古沢希代子 院生・若手研究：細川真由
編集委員会	宮城大蔵（主）、井上正也（副）、大林一広（副主任）、柄谷利恵子（副主任） 『国際政治』編集担当者 研究分科会ブロックA幹事、B幹事、C幹事、D幹事
書評小委員会	柄谷利恵子（主任）、大山貴稔、小浜祥子、河越真帆、小林昭菜、佐々木雄一、大道寺隆也、手塚沙織、藤山一樹、松尾昌樹、三船恵美
英文ジャーナル 編集委員会	鈴木基史（主）、廣野美和（副）、伊藤融、籠谷公司、片桐梓、鈴木一敏 編集スタッフ：氏家佐江子、桑原洋子
広報委員会	倉科一希（主）、和田洋典（副） 小林哲（アシスタント）
国際交流委員会	楠綾子（主）、林載桓（副）
学会奨励賞 選考委員会	大津留（北川）智恵子（主）、大庭千恵子、川島真、清水耕介、戸田真紀子、村上勇介、毛利聡子
研究大会 実行委員長	2022年度 本多美樹（仙台大会） 2023年度 渡邊智明（福岡大会） 2024年度 中内政貴（札幌大会）

【研究分科会責任者連絡会議】（\*は2022年11月からの新任）

Aブロック（歴史系）		Bブロック（地域系）	
日本外交史	中島琢磨	ロシア東欧	長谷川雄之
東アジア国際政治史	福田円*	東アジア	土屋貴裕*
欧州国際政治史・欧州研究	小川浩之	東南アジア	青木まき
アメリカ政治外交	水本義彦	中東	千葉悠志*
		ラテンアメリカ	浦部浩之*
		アフリカ	矢澤達宏
Cブロック（理論系）		Dブロック（非国家主体系）	
理論と方法	松村尚子	国際交流	加藤恵美
国際統合	東野篤子*	トランスナショナル	細田晴子*
安全保障	栗田真広*	国連研究	藤重博美*
国際政治経済	三浦聡*	平和研究	二村まどか
政策決定	齊藤孝祐	ジェンダー	古沢希代子
		環境	高橋若菜
院生・若手研究	細川真由		

受賞論文 大澤傑氏「ニカラグアにおける個人化への過程」(『国際政治』207号所収)、  
藤田吾郎氏「芦田書簡」の再検討(同号所収)

2022年度の奨励賞選考委員会は、該当する9本の論文を対象にして1次選考と2次選考まで2段階に亘る選考を行いました。9本の論文はいずれも先行研究への修正を試みたもので、十分に高い水準を満たすものでした。ただ、中には、学術的なインプリケーションにおいて、やや物足りない印象が残る論文もありました。こうしたなかで委員会は、最終的に大澤傑氏「ニカラグアにおける個人化への過程」(『国際政治』207号所収)、藤田吾郎氏「芦田書簡」の再検討(同号所収)の2本の論文を奨励賞候補として選考しました。2本の論文は最終選考で同点評価となり、加えて、それぞれ異なる分野を対象とする論文であったことを踏まえて今年度は2本の論文を候補とした次第です。それぞれの論文を奨励賞候補とする上で委員会は次のような理由を考慮しました。

まず大澤論文は21世紀のラテンアメリカ政治について、個人化という概念を用いる方法により理論的貢献を試みています。つまり大澤論文は、中米で最貧国のニカラグアで安定的な権威主義が構築される理由を説明しており、ラテンアメリカ研究に対して重要な貢献をしました。その際、ニカラグア政治においてオルテガ政権の個人化がどのように進んだか、というテーマを設定し、国内政治と国際政治という複合的枠組みを用いて位置付けています。さらに、権威主義体制に関するB. GeddesやE. Frantzなどの理論枠組との対話を通して、自らの研究のオリジナリティを主張しました。大澤論文は、現在、理論化途上にある個人化に新たな視座を提供する可能性があり、加えて内政要因が国際関係に与える影響を検討する上でも有益な貢献を行っています。

次に藤田論文は、旧安保条約(1951年9月調印)に盛り込まれ、その後、1960年の安保条約改定により削除された内乱条項の起源を解明した論文です。その際、外務省、内務省、防衛庁関連の資料を積極的に、しかも綿密に読み込むことによって、片山内閣の芦田均外相から第8軍司令官アイケルバーガーに宛てた「芦田書簡」を再検討しました。つまり、この書簡で芦田が構想した講和後の安全保障に関する有事駐留論が、その後、第2次吉田内閣のもとで米軍の本土駐留構想に転換する過程を実証的に考察しています。その際、契機となったのは、占領下でマッカーサーが容認した警察機構の大幅な分権化でした。芦田は警察力強化によって日本の責任において国内治安の維持を図ることを主張、アメリカによる内乱鎮圧には消極的でした。しかし、その後、十分な警察力強化が実現に至らないまま、1949年には対日講和論が台頭しました。日本政府は、1951年初頭に構想された旧安保条約に内乱条項を置くという米側からの打診を受諾する結果となります。藤田論文が旧安保条約の内乱条項について、当時の国内治安状況の実態を踏まえて考察した成果は、戦後の安全保障政策研究だけでなく安保条約をめぐる歴史的考察においても、これまでの通説に大きな解釈上の挑戦を行ったものと言えるでしょう。

このように大澤論文と藤田論文は、先行研究における論点を的確に整理し、その上で理論的・歴史的な貢献を行いました。以上の観点から、奨励賞選考委員会は大澤論文と藤田論文を奨励賞の候補として推薦する次第です。今回の選考では多くの力作に接しました。受賞を逃した会員の皆様も自信をもって今後のご研究に励まれますよう期待しています。

【学会奨励賞選考委員会】

受賞のこぼ

大澤 傑

目標としていた『国際政治』に拙稿が掲載されたことだけでも嬉しく思っておりましたが、このたび奨励賞をいただけたことは身に余る光栄です。選考委員の先生方、ラテンアメリカ特集号(第207号)の編集担当であった宮地隆廣先生にはこの場を借りて御礼を申し上げます。また、論文を丁寧に査読し、示唆に富むコメントをくださった匿名の査読者の先生にも感謝申し上げます。

受賞論文は、近年、世界で広がる政治体制の個人化に対して、ニカラグアという事例を用いて、理論と事例の架橋を目指したものです。無謀とも思える挑戦でしたが、できるかぎり地域研究において紡がれてきた文脈を念頭に置きながら、個人化の理論化に貢献することを模索しました。研究を通じて明らかとなった点は多々ありますが、私が特に注目したのは、ニカラグアの事例において、援助と制裁の双方が個人化の強化に利用されたことでした。この事実から、民主主義の後退と権威主義の台頭が叫ばれる現代国際社会において、権威主義化が進む国に対して諸外国がどのように向き合うかについて考えさ





られました。今後はこのような点を踏まえ、体制変動に対する内政と国際政治の相互作用に注視しながら研究活動に励んでいく所存です。

最後に、これまでご指導いただいた全ての方に感謝を述べさせていただきます。  
この度は誠にありがとうございました。

#### 受賞のことば

藤田吾郎

このたびは、榮譽ある学会奨励賞をいただくこととなり、大変光榮に存じます。まずは、匿名の査読者の先生方、編集委員会の先生方、学会奨励賞選考委員会の先生方に、心より御礼申し上げます。

私は、本年3月に早稲田大学の政治学研究科にて博士学位を取得いたしました。本論文は、この博士論文の重要な一部分を構成するものであります。私は大学院入学後、戦後初期の日米関係に関する研究を志しましたが、早々に先行研究の層の厚さに圧倒されました。そして、いかにしてオリジナルな議論を打ち出すか、試行錯誤の日々が続きました。そのような中で閃いたのが、間接侵略という国際政治と国内政治の狭間に位置する問題に着目することで、日米関係史と日本の治安史という、これまで個別に研究が蓄積されてきた2つの領域の接合をはかるという視点でした。この視点を採用したことで、「芦田書簡」の作成および提出と、警察改革の実施という、同じ時期に展開していた2つの問題が、いかに相互に関連していたのかという論点に気づくことができ、本論文の執筆につなげることができました。



今にいたるまでの研究の過程においては、実に多くの方々からご指導、ご助言をいただきました。とりわけ、学部時代より一貫してご指導いただいていた田中孝彦先生には、なかなか成果を出さない私を長きにわたって支え、励ましていただくとともに、研究の進展にむけて実にさまざまなアドバイスをいただきました。これまでの学恩に報いるため、今回の受賞を励みとしながら、今後より一層の研鑽に励みたいと思います。

研究を進める中で気づかされたのは、一見すると研究され尽くしたと思われそうなテーマの中に、未解明の論点がいまだ数多く存在しているという事実でした。今後は、実証の精度を高めることに加えて、柔軟な視点のもとに新たな問いを生み出すことを、常に自分に言い聞かせながら、より一層真剣に研究に取り組む所存であります。

このたびは、誠にありがとうございました。

---

### 2023 年度研究大会 部会企画・自由論題報告募集のお知らせ

---

2023 年度研究大会（福岡国際会議場（福岡市）、2023 年 11 月 10 日~12 日）での部会企画の提案及び自由論題(部会)の報告希望を募集致します。応募に必要な事項は以下の通りです。応募に際して、報告者について下記の内規を確認していただくようお願い致します。なお部会（自由論題部会を含む）での報告者には、ペーパーの提出が義務づけられています。

締め切り：**2022 年 12 月 9 日（金）（必着）**

送付方法：応募は e-mail または郵送にてお願い致します。

(1) 送付先：〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷 1-18-24

津田塾大学総合政策学部 大島美穂

e-mail：oshima☆tsuda.ac.jp（☆を@に置き換えてください）

メールの件名または封筒に「日本国際政治学会 2023 年度研究大会部会企画・報告応募」と明記してください（郵送の場合、学内の配達に時間を要するため、都内からでも投函翌日には届かないことが多いので、余裕を持って発送してください）。

(2) 応募に必要な事項

①部会企画案

(i) テーマ、(ii) 趣旨（800 字~1200 字程度）、(iii) 報告者、司会者、討論者などを記すこと。英語で実施する場合は、その旨を明記してください。

②自由論題報告案

(i) テーマ、(ii) 要旨（800 字~1200 字程度）などを記すこと。英語で実施する場合は、その旨を明記してください。

部会企画の提案者もしくは自由論題の報告希望者のいずれも、氏名、所属、職名、連絡先（住所、電話 番号、e-mail アドレス）を記すこと。

応募用紙は、学会ウェブサイト（<https://jair.or.jp/committee/kikaku/8666.html>）からダウンロードできます。

部会参加に関して、以下の事項が内規に定められていますので、ご注意ください。

1. 部会参加者は、原則として、会員及び入会申請中の者とする。
2. 一般会員が、部会及び自由論題部会において報告を行う場合、応募時において過去二年間（2021 年度、2022 年度）に開催された研究大会の部会で報告を行った会員（申請中を含む）は、報告者の候補たりえない。この原則は司会者及び討論者については適用されないものとするが、なるべく同じ会員の登壇は控えることとする。
3. 学生会員が、部会及び自由論題部会において報告を行う場合、応募時において過去一年間（2022 年度）に開催された研究大会の部会で報告を行う会員（申請中を含む）は、報告者の候補たりえない。この原則は司会者及び討論者については適用されないものとするが、なるべく同じ会員の登壇は控えることとする。
4. 自由論題部会にて報告を行う場合、上記の2.及び3. に加え、応募時において過去二年間（2021 年度、2022 年度）に開催された研究大会の分科会で報告を行っていない会員（申請中を含む）、学生会員の場合は過去一年（2022 年度）の大会で報告していない会員が優先される。

企画・研究委員会主任 大島美穂

---

## 理事会便り

---

### 編集委員会からのお知らせ

1. 新理事会の発足に伴い、2022-2024 年期は主任：宮城大蔵、副主任：井上正也、大林一広の体制となりました。以下 にございます編集主任、副主任へのご連絡はすべて [jair-edit@jair.or.jp](mailto:jair-edit@jair.or.jp) 宛にお願いします（メール送付 の際は、☆を@に修正してください）。
2. 今後の『国際政治』の刊行予定についてご案内いたします。特集タイトルはすべて仮題です。
  - 2022 年度
    - ・ 208 号「SDGs とグローバル・ガバナンス」（編集：蟹江憲史会員）
    - ・ 209 号「冷戦史と日本の国際関係」（編集：黒崎輝会員）
    - ・ 210 号「岐路に立つアフリカ」（編集：杉木明子会員）
  - 2023 年度
    - ・ 211 号「ヘルスをめぐる国際政治」（編集：来栖薫子会員）原稿申込期限は終了しました。
    - ・ 212 号「二国間外交と多国間外交の交錯」（編集：高橋和宏会員）原稿申込期限は終了しました。
    - ・ 213 号「アメリカ—対外政策の変容と国際秩序」（編集：西山隆行会員）原稿申込期限は終了しました。
  - 2024 年度
    - ・ 214 号「地球環境ガバナンス研究の最先端（仮）」（編集：坂口功会員）  
申込締切：2022 年 11 月 30 日 原稿締切：2023 年 10 月 31 日  
214 号投稿募集：<https://jair.or.jp/committee/henshu/7772.html>
    - ・ 215 号「1970 年代と 80 年代の日米関係—同盟深化の道程（仮）」（編集：楠綾子会員）  
申込締切：2022 年 11 月 30 日 原稿締切：2023 年 11 月 30 日  
215 号投稿募集：<https://jair.or.jp/wp-content/uploads/committee/no215recruit.pdf>
    - ・ 216 号「国際秩序の変容と『新たな地域主義』（仮）」（編集：勝間田弘会員）  
申込締切：2023 年 3 月 31 日 原稿締切：2024 年 3 月 31 日  
216 号投稿募集：<https://jair.or.jp/wp-content/uploads/committee/no216recruit.pdf>

会員の皆様の積極的なご応募をお願いします。

3. 独立論文は随時応募を受け付けています。こちらもぜひ奮ってご応募ください。執筆要領等の詳細は学会 Web ページ『『国際政治』投稿等 ([https://jair.or.jp/membership/application/rules\\_for\\_papers.html](https://jair.or.jp/membership/application/rules_for_papers.html))』に掲載されている『『国際政治』掲載原稿執筆要領』をご覧ください。応募・問い合わせ先は、編集委員会 副主任：井上正也、大林一広までお願いします。
4. 『国際政治』は特集論文、独立論文とも査読プロセスを経ています。執筆から掲載までに一定の修正が求められることが多く、時間とエネルギーを要するプロセスですが、論文の質の向上には確実に貢献していると考えています。会員各位にはなお一層積極的な投稿および再投稿をお願いします。また、編集委員会より査読をお願いした際には、多くの会員に快くお引き受け頂いており、心より感謝しております。引き続きお力添えを賜りますようお願い致します。
5. J-STAGE での『国際政治』電子版では、刊行後 2 年以内の号の論文について、購読者番号とパスワードを用いた会員限定の閲覧を行っています。2020 年 7 月現在で、192 号 (2018 年 3 月刊行) までの閲覧が可能です。購読者番号とパスワードは、紙媒体ニューズレター146 号に掲載されていますが、会費 納入用紙、『国際政治』等、各種の郵便物とともにお知らせしていきます。また、オンライン会員管理情報システム (e-naf) にお入り頂くと必要な情報をご覧いただけます。
6. 『国際政治』に掲載した論文を執筆者が転載 (複製利用) する場合、ご自身の著書等に利用される際は、事前に文書で理事長に申し出てくださいことになっており、またリポジトリ等に掲載される際は、編集委員会主任に申し出てくださいことになっております (『国際政治』掲載原稿執筆要領 1-(6)・(8))。前者については、学会ウェブサイトに掲載している申請書をご利用ください (<https://jair.or.jp/wp-content/uploads/documents/tensaikyoka.pdf>)。双方とも連絡は編集委員会主任：宮城大蔵までお願いいたします。

編集委員会 主任 宮城大蔵  
副主任 井上正也・大林一広  
jair-edit☆jair.or.jp  
(☆を@に変えてください)

---

### 国際交流委員会からのお知らせ

2022 年度国際学術交流助成 (第 2 回募集) への申請を公募しております。申請資格・助成対象・申請方法の詳細については、以下のページをご参照ください。申請用紙もウェブページよりダウンロードいただけます。

<https://jair.or.jp/committee/kokusaikoryu/8761.html>

募集の締切は 11 月 24 日 (木)、一橋事務所必着です。

国際交流委員会主任 楠 綾子

---

### 広報委員会からのお知らせ

学会ウェブサイトでは、会員の皆様からのシンポジウム等のお知らせや新刊紹介などを随時掲載しております。情報交換・共有の場としてご活用ください。掲載を希望される場合は、ウェブサイトの「お知らせ投稿フォーム」 (<https://jair.or.jp/membership/information/form.html>) をご利用のうえ、ご投稿ください。統一的な記録を残していく必要がありますので、お手数ですが、上記のフォームへの記載をお願いいたします。パスワードは、「オンライン会員情報管理システム (e-naf)」内に掲載されております。e-naf にログインいただきご確認ください。

その他、ニューズレターやウェブサイトに関してお問い合わせ等がありましたら、広報委員会 (jair-pr☆jair.or.jp) にご連絡ください。(☆を@に置き換えてください)

広報委員会主任 倉科一希



## ■編集後記

イギリスの首相交代やイタリアの新連立政権成立、ブラジル大統領選挙にアメリカの中間選挙の混乱など、各国の政治的混乱が依然として続いているようです。国内政治と国際関係の相互作用を改めて考える機会になりそうな気がしております。(IK)

今期より広報委員に就任いたしました。インクルーシブネスと申しますか、こうした媒体が学会におけるさまざまな声の発信の場であるよう努めていきたいと考えております。よろしくお願いたします。(HW)

今年度の研究大会は対面での開催が実現しました。実際に会場に集まり討論することの良さを改め

て感じました。この度の研究大会の実現に尽力された仙台大会実行委員会や関係者のみなさまに感謝申し上げます。(SK)

日本国際政治学会ニューズレター No.173  
(2022年11月19日発行)

発行人 飯田 敬輔  
編集人 倉科 一希・和田 洋典・小林 哲

〒187-0045 東京都小平市学園西町1-29-1  
一橋大学小平国際キャンパス国際共同研究  
センター2階 客員教官研究室3  
日本国際政治学会 一橋事務所気付  
倉科 一希 [jair-pr@jair.or.jp](mailto:jair-pr@jair.or.jp)